

No.62 2003. 3

株よかネット

もくじ

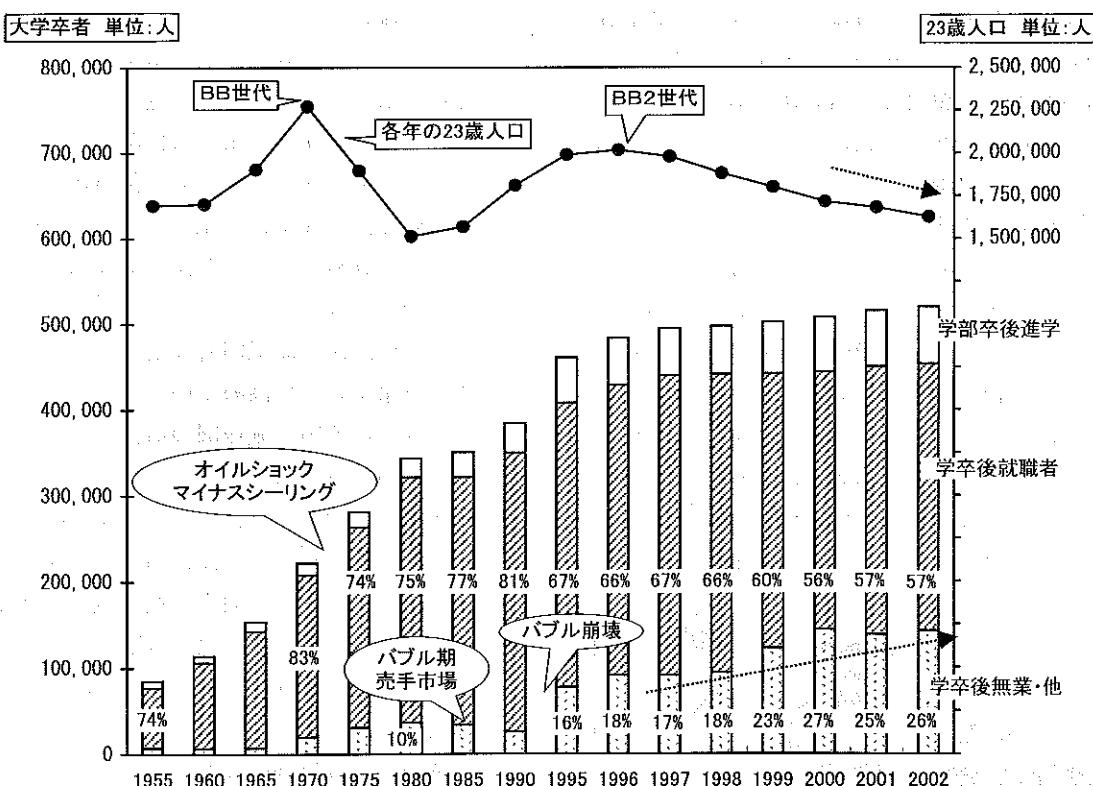
NETWORK

- “川と人とのかかわり”を再生し、流域の経済・社会活性化させよう
～「筑後川流域連携俱楽部」のとりくみ～ 2
- 一歩外へ出ることが、本当の第一歩
～稲築町職員のウォッチング～ 4

見・聞・食

- “かまくら”と“とりまわし料理”で授賞を祝う
～宮城県の宮崎町「食の博物館～冬編～ 6
- 黒沢映画「乱」の合戦シーンの甲冑を全部つくった
～鎧・兜づくりのパイオニア、丸竹産業㈱～ 8
- アイランドシティで生き物博士・野鳥博士になってみる 10
- 近況
みんなでオブジェをつくろう！ 11
- 本・BOOKS
反逆の獅子 陸軍に不戦工作を仕掛けた男・浅原健三の生涯 12

●大学学部卒後の無業等の比率が3割へ



第二次ベビーブーマーが大学に入学した92年前後に大学進学率は20%を超えて00年には35%まで一貫して上昇。23歳人口をみても一貫して減少しており、大学収容人数増も、90-95年を境にほぼ沈静化したようである。

一方、学部卒業後の進路をみると学部卒の「無業・他」の比率が3割に迫っている。かつては入学時の現象として見られていたモラトリアムが、今や「卒業しても就職しない、進学もしない」という学部卒後までその期間が伸びている。「大学に何を求めてきたのか」という悩みが解決されず、そのまま「大学を出て何をしたいのか」を引きずっている若者たち。「個族化」をキーワードに実施した平成14年度NIRA（総合開発研究機構）研究結果を次号より連載する予定です。

“川と人とのかかわり”を再生し、流域の経済・社会を活性化させよう ～「筑後川流域連携俱楽部」のとりくみ～

小田 好一

筑後川流域の人々の生活はかつて川と密接な関係にあった。水車などによる利水技術によって筑後平野の田畠に恵みをもたらしたのみならず、水運のためのインフラとして人々の生活に密着していた。

しかし、輸送は今や陸路に変わり、時に猛威をふるう筑後川に堤防を築いたことによって人々は隔離され、川に背を向けて生活するようになった。

地方シンクタンク協議会九州・沖縄ブロック交流会が2月21~22日に開催された。「地域のネットワークを活かしたまちづくり～河川流域連携を事例として～」と題して、筑後川流域連携俱楽部の取り組み、なかでも実践的な「筑後川まるごと博物館」の取り組みについて同俱楽部理事西島氏、同博物館事務局長成毛氏のお話があった。

●そもそもなぜ流域連携を思い立ったのか。

- ・流域連携を思い立つまでに3つの大きな流れがある。
- ・1つ目の流れは、大川に始まった「筑後川フェスティバル」である。筑後川の上流に西日本有数の杉産地「日田」がある。下流には同じく西日本有数の木工産地「大川」がある。両者はかつて、筑後川の水運で結ばれており、日田で伐採された杉は川舟によって大川に運ばれていた。当時、両者は水運を通じて密接につながっており、ともに栄えていた。しかし、輸送の中心が陸路に推移するとともに、木工の材料が90%以上輸入材となり、両地域の川を介した経済的つながりは途絶えた。後に流域の人々と川との関係が希薄になり、河川への关心が低くなった。そこで環境の点、地域振興の点から、かつてあった絆をとりもどそうという取り組みが始まったのが筑後川フェスティバルの発端である。毎

年流域市町村等で開催され、今年で16回目を迎える。

- ・2つ目は下流域に立地する久留米大学産業経済研究所で始まった筑後川流域圏の総合的な研究である。同俱楽部の代表を務める久留米大学駄田井教授が研究会の中心人物であった。流域の各々の地域ではそれぞれどんな課題をもつかを探っていくうちに流域圏研究会がうまれた。
- ・3つ目はダム問題を抱える日田市で始まった「水環境セミナー」である。成毛氏が代表を務める「日田市民セミナー」が主催していた。日田市上流にある「下筌ダム、松原ダム」から導水管によって福岡都市圏に水を送るというダム群連携構想が計画され、水量が大幅に減少するという危機感から河川の水に关心を持つ機会が増えた。それがきっかけで筑後川がもたらした流域の自然、風土、文化にはどんなものがあるのか、それらを支えるどんな活動団体があるのか、調べようということになった。後にこのセミナーは上記の流域圏研究会と共に共催になり、研究の成果をさらに高めていった。
- ・ちょうどこの頃、流域圏の活性化を目指すイベントである筑後川フェスティバルと流域圏研究のかけはし的な位置にいたのが先述の駄田井教授であった。駄田井教授は両者をつなぐような組織、すなわち流域圏の自然、風土、文化を保全し、経済、社会の活性化も図れるような組織ができるだろうかと考えていた。そのためには流域の連携が不可欠ということに行き着き、「筑後川流域連携俱楽部」を設立することになった。
- ・同俱楽部の設立に当たって、このほかにも重要な人物がいる。柳川市で掘割の復活に取り組んだ故広松伝氏である。広松氏の取り組みは水や





機関誌と新聞から生まれた筑後川流域ガイドブック

河川に対する住民や行政の考え方を180度変えただけでなく、法律までも変えてしまった。それまでの河川法は「利水・治水」を軸としており、河川はあくまで道具であり、やっかいものにすぎなかった。しかし、柳川の堀割活動によって人々の河川に対するその考え方を「川を守ろう、美しくしよう」と変えたとともに河川法も「環境・住民参加」を主眼とした新河川法に変わるきっかけとなった。

※柳川の堀割についての詳細はよかネットNO.3(1993.5)、NO.54(2001.11)参照

- かつて堀割は輸送に欠かせなかったほか、その水は飲用にもなっており、筑後川と同様、生活に密着していた。しかし、人々が水に背を向けて生活するようになったことで堀割への関心が薄れ、汚染が進むようになった。昭和40年頃から、全市をあげて浚渫するようになった。堀割の大切さを訴え、住民総出で浚渫作業するなど、自ら携わったことで堀割に対して愛着を感じ、結果堀割を美しくしようという意識が住民の中に芽生えた。

筑後川流域連携俱楽部はこれらの活動団体のヨコのネットワークを強めるため、2ヶ月ごとの新聞、年4回の機関誌を定期的に発行し、情報交換に役立てているほか、地域を潤し、地域活動への関心を高めるエコマネーの取り組みなども行っている。そして、同俱楽部が流域連携俱楽部の目的を具現化するために取り組んだのが、「筑後川まるごと博物館」構想である。

●九州4県にまたがる筑後川まるごと博物館

- 筑後川まるごと博物館は筑後川流域全体を“ひ

とつの大きな博物館”としてとらえ、上流から下流までの自然、風土文化、産業等を体験交流できるようなシステムづくりである。同博物館のおもしろい点は「学芸員制度」である。久留米大学で「まるごと博物館学芸員」の養成を兼ねた「筑後川流域講座」を開講している。学生及び一般の方を対象にしており、参加は自由である。このほか流域のフィールドワークや地域の活性化など博物館をより高度なものにするために活躍している。

- 第一期の昨年は学生104名、一般50名が受講し、論文、面接の審査の上、22名に学芸員の認定証が授与された。学芸員になると地域ガイド、総合学習の支援のほか地域イベントの手伝いなど様々な場面で活躍することになる。

まるごと博物館には地域の風土、文化の継承、自然の保全、活性化に携わる活動団体が数多く加盟している。なかでもおもしろい活動のひとつを紹介する。

●水の流れとともに発展した小鹿田焼のシステム

〈小鹿田焼窯元、坂本茂木氏〉

22日の視察では小鹿田の坂本茂木さんに小鹿田焼の現状についてお話をいただいた。

※小鹿田（おんた）（大分県日田市）についての詳しい内容は、よかネットNO.17(1995.9)参照。

- 小鹿田を囲む山々には小鹿田焼のもととなる陶土が豊富にとれる。また、日田は杉の山地であることから、多くの製材所があり、木材の切れ端を窯に使用し、灰は釉薬（ゆうやく）に使用する。さらに土を細かく碎く動力は水の力（水車）であり、轆轤（ろくろ）は足の力である。材料から動力までほとんど地域でまかなうことができるのが小鹿田焼の特徴である。

- 小鹿田の陶土は保水力が強く、乾燥するまで1ヶ月ほどかかる。乾くのが早ければ機械などを

～小鹿田（おんた）焼民陶の由来～

小鹿田焼（別名皿山焼）は、宝永2（1705）年に小石原村の柳瀬三右衛門が技法を、大鶴村の黒木十兵衛が資金を、小鹿田の仙頭、坂本家が土地を提供して開窯したと伝えられる。

李朝系の焼き物で、主な手法に飛かんな、はけ目などがある。昭和26年柳宗悦（民芸学者）、同29年に英国民芸家バーナード・リーチ氏の来山により広く知られるようになり、同45年国の文化財の指定を受ける。（パンフレットより抜粋）

導入して大量生産できたかもしれないが、それができない。また、保水力のある周囲の陶土は安定的に水を流し、枯れることがない。その枯れることのない水を利用したのが陶土を練る唐臼である。今思えば、近代化できなかつたことが、逆に小鹿田ブランドを残すことにつながった。つまり小鹿田焼は“自然に守られた”ということだった。

近年、道路がよくなり、観光バスで行き来ができるようになって観光客が増加し、ほとんどの窯元の家もきれいに建てかわっている。あるカメラマンは「集落の家々が小ぎれいになり、絵にならない」とまで言ったそうだ。いかにも皮肉な現状だ。

坂本さんの話では小鹿田焼の昔ながらの製法に我慢してこだわってきたわけではなく、そうせざるを得ない小鹿田の陶土の性質があったということだった。大量生産こそ良いとされた時代が終わり、少量生産で、昔ながらの製法であることが小鹿田焼の価値を高める結果となった。

●持続可能な地域連携の秘訣は？

筑後川まるごと博物館の良さは“いいかけんさ”と思う。会費は払うが、定期的な会議などは設けていない。裏を返せば、各団体がそれぞれ必要なときに、このネットワークを活かした取り組みができるということだ。この“いいかけんさ”が4県（上流より熊本県、大分県、福岡県、佐賀県）にまたがる広大な地域連携を保ち、博物館が継続することにつながっているということだった。

（おだ こういち）

一歩外へ出ることが、本当の第一歩

～稲築町職員のウォッチング～

伊藤 聰

●町職員の地区担当制を進めるため

稲築町は筑豊地域の旧産炭地域である。今は約2万人の町だが最盛期には4万人以上が住んでいた。基幹産業を失った旧産炭地域は依存体質が強いといわれている。住民は行政への依存、市町村も国や県への依存がある。このことは炭鉱会社の福利厚生が充実していたことと無関係ではないらしい。

住民の依存体質はときに一部の人の強い要望に

なり、それが続くと行政の方には住民とあまり深く関わりたくないという雰囲気が生まれ、行政と住民の間に距離ができてしまう。しかし、炭鉱閉山からもう40年になる。そろそろ変わらなくてはいけない。

稲築町では、2年前から行政職員と住民のまちづくり会議が開かれ、できることは自分たちでやる、自立した地域づくり、コミュニティづくりを進めていく構想が掲げられた。

そのために、町内会などの地域組織を中心として活性化しようと考えたが、まずは職員から行動を始めようということで、職員の地区担当制を進めることとした。平成15年度から動きはじめる予定である。全ての職員に地域参加の機会を持って欲しいとの想いから、全職員を27の町内会に振り分けるが、その後の行動はある程度自主性に任される。

この地区担当制を進める前に「地域をよく知るきっかけづくりが欲しい」という職員の意見から、2月1日にまちのウォッキングを行うことになった。

●歴史と食とかっぱをテーマにコース分け

ウォッキングは「歴史・炭鉱コース」「食と買い物コース」「かっぱめぐりコース」の3つのコースに分かれた。職員には事前にコースごとに集まって、各自まわるルートを考えてもらった。

「歴史・炭鉱コース」は、1200年代に作られた五百羅漢、有名な歌が稲築三部作として残る山上憶良の万葉歌碑、炭鉱で実際に使っていた練習坑跡、完成間近の沖出古墳公園などをまわった。

「食と買い物コース」は、炭鉱時代に栄えた面影を残す商店街、市場のような隠れたスーパー、



PRのためのサンドイッチマンも役割分担で

午前中で売り切れるまんじゅう屋、民間の農産物販売所等をまわった。この班はさすがに（ねらい通り？）若手の女性が多くいた。

「かっぱめぐりコース」は、悪さをしたかっぱが結びつけられたという大樟、最近増えているかっぱの「なつきちゃん」の像等。このなつきちゃん（「いなつき」だから）は町のイメージキャラクターで、町民には結構浸透している。

●職員がまちかどで町民にインタビュー

はじめに簡単な体操とゲームをやって頭と体をほぐすのだが、これでその日の雰囲気が決まる。職員のワークショップ（若手から収入役まで参加）で地域理解のためなどと言っても、遊び心いっぱいでのいいのだなという流れになれば、半分は成功といえる。この日は「爆弾ゲーム」でベースをつかんだ。

ウォッキングの途中では、街角でのインタビューを試みた。相手は班によって、通りがかりの高齢者か子どものどちらかを指定される。子どもに「稲築町は好き？」と聞くと「大好き」と答えが返ってきた。職員が危惧するより、みんなそこそこ心地よく暮らしているようだ。職員といえども、町民に声をかけるのは勇気がいったらしいが、本当は気軽に声を掛け合えるような関係が必要だ。

昼食もウォッキングのひとつの課題とした。自分のまちでおいしい店を知っているかどうかは結構重要なことだ。いざというとき友人などを案内することもできるし、まちにお金も落ちる。参加者は班ごとに事前に食べたい店を決めておいた。お好み焼き屋、焼き肉屋などに分かれたが、私の行った定食屋は客の9割がチャンポンを注文する店で、古い小さな店構えだが客足が途絶えることはなく、店主にインタビューするのも難しい状態だった。

各班戻ってきて、まとめを発表していく思ったのは、必ずしも明確な問題意識を持っていなくても、歩いてみてまわれば、良いところ気になるところは素直に見えてくるのだな、ということだった。共通認識するだけでも意味がある。

●まちづくりの第一歩は文字通り一歩出ること

稲築町の職員は、現在約3割が町外在住である。町に縁もゆかりもないという人はそういないとは思うが、通勤距離が伸びることは、それを言い訳にすることはできないが、地域や住民との距離が

離れる一因もある。また、先に行った職員研修会でのアンケートで「まちづくりそのものが分からぬ」という意見が少なからずあった。まちへ一歩出る、という簡単な取り組みも、まちづくりの第一歩として、大きなステップになるように思えた。

地域の自立を促す、ということは将来的な目標ではあるが、ある意味、既に自治の組織として活動している町内会に対して言うにはおこがましい面もある。そこで、とりあえずの目標は職員が地域を知ること、地域住民に馴染むことにおいて地区担当制を進めることとした。これには、何でもするということで地域に入っていき、雑用係にされたり、要望ばかり言われたりしても困る、といった理由もある。しかし、地域を良く知るだけでも行政のサービス向上にはつながるだろう。

最初は、職員が担当となった町内会を訪問して、どんな地域なのか、どんな行事を行っているのかなどを取材する、いわば教えてもらう。それから、年間行事などにできるだけ参加する。1年間は職員の研修事業の一環としても位置づけている。

研修のあとは、地域の良き相談者として、あるいは地域づくりのパートナーとしての関係づくりができればよいと考えているが、少し今後の経過をみてからになることと思う。

●地域とつながる経験を積む

実はその一方で市町村の合併問題があり、先行きが流動的な中でどこまでの成果を目標とするのか、という課題もある。実際に合併するとなれば、時間はそう長くない。合併後の自治体に何がどの程度引き継がれるかは不透明である。しかし、合併して自治体が大きくなるほど、行政職員と住民は離れやすくなる可能性がある。その時に必要なのは職員が住民の声を聞く意識と行動、そして地域が自立できるようにしておくことだと思う。場合によっては職員も生き残りが必要となってくる中で、地域とつながる経験を積んでおくことは有効なことだろうと思われる。

今回のウォッキング、職員の参加は17名と、全職員の1割弱であったが、これを起点として輪を広げていければと思う。

(いとう さとし)

“かまくら”と“とりまわし料理”で授賞を祝う
～宮城県宮崎町「食の博物館～冬編」～

尾崎 正利

2月9日に東北の宮城県宮崎町で「食の博物館～冬編」が行われた。私が初めて訪れた昨年11月の秋編の時は町内の宿泊場所が満杯だったので、実行委員の要をつとめている商工会長さんのご厚意に甘えて自宅に泊まさせていただき、それをきっかけに様々な地元の方と知り合う機会に恵まれた。今回の冬編の案内状には「かまくらととりまわし料理」とある。かまくらで遊ぶなど九州人には夢のような世界だ。とりまわし料理とは家庭料理を大皿に寄せて持ち寄り一緒に食べる食事だ。地元の方からもお手紙で直接お誘いも受けたので、冬山のこの催しに出席することにした。

ちなみに参加費は昼食、とりまわし料理などの料金を含めて3000円であった。

●最初は体育館にずらりと並ぶ家庭料理に圧倒

「食の博物館」は平成11年に始まり年1回開催されていた「食の文化祭」が発展したもので、成14年度から四季それぞれで年4回、毎回テーマを決めて行われている。

私がこの活動を最初に知ったのは3年ほど前「現代農業」（農文協）を読んだ時で、体育館に地域の家庭料理をずらりと並んだ様子を伝えた見開きの写真は壯観であった。

この催しの経緯を宮崎町商工会の資料「H U S T L E (ハッスル)」にまとめられた「宮崎町の食の取り組み」から紹介したい。（右上参照）

4年目を迎えた平成14年度からは春夏秋冬の各季節でテーマをもって1～2日間開催されており、周辺市町村を始めとする宮城県下のみならず、東北一円あるいは関東方面からも数多くの人が訪れる。昨年11月に行われた秋編では2万人以上の来訪者があった。

こうした一連の活動のいきさつについて、「食の博物館」実行委員の実行役である加藤嘉一さん（商工会会長）、橋本幸司さん（商工会、「食の博物館」担当）ほか様々な方のお話を聞いた。特徴的なことを以下にまとめる。

①宮崎町は中羽前街道に面しており、古くから人

宮崎町の「食」の取り組み……

宮崎町では商工会を中心に、平成8年から地場産品開発や観光開発などが話し合われてきました。その中から、新たな特産品づくりではなく、自然と風土、地域、家庭に伝わる多彩な食を見直そうという動きが起こりました。その後、平成11年の「食の文化祭」開催をきっかけに町をあげて、おいしい、安心な食への取り組みが進められてきています。

平成8年10月 商工会で「むらおこし」事業を立ち上げる
平成9年4月 補助事業による特産品開発に取り組む

平成10年	地域資源や観光客のアンケート調査、地場産品開発、観光資源開発、まちづくり研究の各部会で活動
平成10年10月	みやざき特産市の開始(以後毎月開催)
平成11年	もともと宮崎町にある「食」を見直そう、と方針転換
平成11年11月	第1回 宮崎町「食の文化祭」家庭料理800品を集める
平成12年11月	第2回 宮崎町「食の文化祭」家庭料理1,300品を集める 特産品等販路開拓支援事業の一環として「手づくりギフト」開始
平成13年11月	第3回 宮崎町「食の文化祭」11,000食の家庭料理試食会を開催
平成14年	「食の文化祭」を「食の博物館」に改め、年4回開催とする 50人の「食の学芸員」を委嘱
平成14年秋	宮崎町おいしさ開発委員会が発足

の往来があったため、農家の商品作物栽培、地域の加工品づくりは盛んな土地柄だった。

②「むらおこし事業」の頃から、加工品を作れば終わり、観光もパンフができれば終わり、そういう風にならないようにするため、地域をどのようにPRしていくべきか話し合った。

③そんな中、民俗研究家の結城登美雄先生のアドバイスなどをもとに家庭の中の多彩な食を生かして地域固有の魅力を出していこうということになった。

④第1回の開催に向けた準備では、料理を出して下さいと28集落全てを回った。ちょうど介護保険事業の説明会があちこちで行われているときなどで一緒に宣伝させてもらった。

⑤第1回で約850種類、第2回、第3回では約1000種類を超える家庭料理が出品され、第3回からは「食べたい」という要望に応えて有料試食も1万1千食分用意した。

⑥商工会の青年部ではお客様の反応などをみて、郷土料理を生かしたレストランや加工品づくりなどの研究を始めたグループもいる。

⑦そんな中、宮崎町の食の取り組みで縁ができる
「こここの水を入れるコーヒーが美味しいから」
と移住してきた若い夫婦なども出てきた。

⑧第4回の今年は四季の魅力を提供しようと年4回、会場を変えて実施している。秋編などには地元の中学生も実行委員に入って、小学生、中学生もバザーで自分たちの料理で商売をやるようになつた。

●かまくらで豆料理と保存食、南国育ちには夢のような風景

今回の冬編の会場は「陶芸の里」「湯~らんど」で町内でも最も寒いエリアに近い場所だ。奥羽山脈の切れ目にあたるこの地区では、直接、雪雲が山にぶつかって豪雪になる。

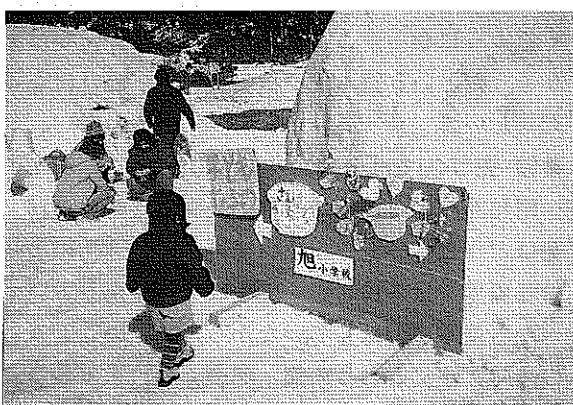
しかし私が訪れたときは気温13℃で小春日和だった。雪原の中暖かさでつぶれないようシート掛けされたかまくらが姿を見せる。

子ども達のかまくら、豆料理のかまくら、喫茶店のかまくら、あぶり焼きのかまくらなど、かまくらの一つ一つがテーマに沿った楽しみを提供してくれる。豆料理のかまくらでは、地元の伝統料理にちなんだお昼ごはんがいただける。この日は、豆乳汁（具たくさん、山芋団子入り）、黒豆ご飯、おからのサラダ、つぼみ菜のおひたし、漬け物などである。豆の香りがしっかりと出ていて上品な味わいだ。

子ども達のかまくらでは、旭小学校の子ども達と先生がチョコレートフォンデュに挑戦。湯煎したチョコにモチなどをつけて振る舞っている。

喫茶店のかまくらでは、窓にステンドグラスのような美しい装飾を入れて、雪のテーブルと机だ。

この喫茶店のかまくらに入つてみると、私にとってかまくら初体験だ。中に入ると意外に広く暖か



子どもたちがつくったかまくら

い。壁や屋根の雪が薄いところから光が透けて乱反射してとても美しい。

かまくらの外では地区の子ども達が、大人が作ってくれた巨大な雪の小山からそり遊びに興じていた。こんなに晴れた日は珍しいそうで、地区の方々が子や孫と一緒に大勢遊びに来ているのが印象的だった。

●授賞式ではどぶろくも登場

今回いただいた案内状によると活動4年目にあたる昨年12月「地域に根ざした食生活推進コンクール2002」で宮崎町は農林水産大臣賞を受賞したこと。「陶芸の里」のホールでは授賞式と兼ねたとりまわし料理のふるまいがあった。

授賞式には浅野史郎宮城県知事も参加されていた。式辞ののち乾杯となつたが、乾杯はどぶろくで行われた。

今回の冬編は参加者も申し込みが必要であったので、人数はあらかじめ想定して行われたが、それでもふんだんに並ぶ家庭料理の種類も量も、かなりのボリュームであった。

東北の冬の味覚ということで、いくつか印象に残った料理があるので紹介したい。

①クマ肉の煮付け……九州に多いイノシシは生息北限の北にあるのでいないが、その代わりツキノワグマがたくさんいる。畑を荒らすので有害獣駆除の対象になっているらしい。

②漬け物と鮭の粕汁……少し漬かりすぎの漬け物の塩味をベースに鮭と酒粕を加えた汁。とても暖まる。

③つぼみ菜の炒め煮……菜の花のような食味だった。料理を作った女性からはもっと食べるとたくさんいただいた。

④ラズベリー・桑の実の寒天……フルーツの果肉、果汁たっぷりのさわやかなデザート。一番最初になくなっていた。

⑤すいとん……アイガモ米の生産グループがいて、彼らは全国各地のアイガモ農法のメンバーと交流していた。すいとんの出汁はアイガモの味だった。

⑥おにぎり……ここはササニシキ、コシヒカリを生んだ古川農業試験場の近くにあるため、とにかく米が美味しい。

⑦ドブロク……絞ったもの絞っていないもの、澄んだものの文字通りにごったもの、など様々



テーブルに並んだ家庭料理の数々

家庭の味。どれも美味しかった。

●雪明かりの灯明で「ありがとう」の文字

夕方、薄暗くなつて昼の間、参加者がスコップとバケツで思い思いにつくつた灯明にロウソクの火を灯した。立体型に組まれた灯明が浮かびだした文字は「おめでとうありがとう宮崎町」だ。

宮崎町は今年4月から加美郡の周辺町と合併し加美町に含まれることになる。今回の受賞も宮崎町としてはおそらく最後になる。食資源の生かし方で結束を強めてきた地域に対する感謝の言葉としての「ありがとう」には、いろいろ考えさせられる。

実行委員会のメンバーの声では「合併しても食の催しを郡部でも拡げていきたい」「もっといろんな活動を展開したい」という前向きなものが多いので少し安心する。

今年度から発足した「宮崎町おいしさ開発委員会」では、地域の味を生かした産業起こしの取り組みを進めていくという。合併後も順当にゆけば5月に春編が実施されるものと思う。春は何が出るのかとまた楽しみな日が続く。

(おざき まさとし)

黒沢映画「乱」の合戦シーンの甲冑を全部つくった

～鎧・兜づくりのパイオニア、丸竹産業㈱～

山田 龍雄

この鎧・兜の製造メーカーは、鹿児島県川内市にある。平成2年には戦国村というテーマパークも開設しており、今回、取材で訪れた本社・工房は市街地の中心部から北側約2kmのところにある。

私たちが伺うと、経理部担当の福山さんに早速、応接間に通された。すると、応接間の隣の展示室に鎮座している数10体の鎧と兜が目に飛び込んできた。

「これは昨年のNHK大河ドラマ、利家とまつで唐沢寿明が着ていたものです。これは同じく大河ドラマで家康に扮した津川雅彦が着ていたものですが、できるだけ軽くして欲しいと注文があつたのでアルミ製にしています。これが鹿児島・菱刈町出身の榎木孝明さんが主演していた「天と地と」の上杉謙信役で着たいたもの、これが福島正則、これは黒田長政の兜です。…………」と次から次に時代考証も兼ねた説明が加えられ、その説明に圧倒され、改めて日本の鎧・兜の美しさと当時の武士の美意識のすばらしさに感動してしまった。

●釣り具からの転換、前社長の趣味からスタート

この会社の経歴はユニークである。会社名からも想像されるように、元々昭和34年に竹製の釣り具メーカーとして始められた。昭和40年代初めにはグラスファイバーなどの新素材の釣り具が製造されるようになって、急激に売り上げも落ち込んだことから、昭和48年に鎧・兜製造メーカーへ転換している。

業種転換のきっかけは、前社長（現会長）の鎧・兜をはじめとした骨董収集の趣味で、鎧・兜なども自前で修理をしていた。

また、釣り具メーカーをしていたころ、出水市の腰矢（こしや）という伝統的弓術を継承している人たちが、ちゃんとした鎧・兜を着て行事を行いたいという要望があったことから、前社長にお声がかかり、鎧・兜を製作したそうだ。さらに、京都の映画製作会社からも骨董会（骨董収集の集まりの会）からの口コミで鎧・兜づくりの依頼がくるようになったことなどから、将来、需要はありそうだという読みが業種転換のきっかけになつたらしい。

●鎧・兜づくりでは全国90%以上のシェア

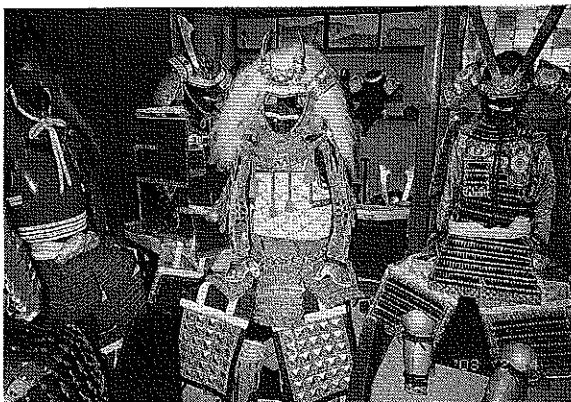
昭和30～40年代初頭の日本映画全盛時代の鎧・兜はどうしていたのか聞いてみると、「あの当時の映画界では本物の鎧・兜を収集・使用していて、一から造ることはしていなかった」とのこと。この当時、注文どおりの鎧・兜づくりにチャレンジしたという意味では、まさに鎧・兜づくりのパイ

オニア企業であり、この早めの業種転換によって、今では他の企業を寄せ付けないオンラインリーワン企業として全国シェア90%以上を誇っている。

経歴書をみると、昭和52年の加藤剛主演の大河ドラマ「草燃ゆる」をはじめ、歴代の大河ドラマは全て手がけており、映画では「真田幸村」「影武者」「乱」などで製作している。特に黒沢明監督の「乱」の戦闘シーンに出てくる数多くの鎧・兜を揃えるのは、この会社の存在なしには出来なかつたと思われる。

この会社の主要な業務分野は別表のとおりである。主なものはTVや映画関係社への販売業（現在、年間の鎧・兜づくりの件数は概ね200～300体）をはじめ、祭りやイベントのリース業と節句の子供用鎧・兜セット販売などである。ちなみに子供用の鎧・兜セットは1体20～30万円であるが、少子化時代の反映か、子や孫のお祝いなどに結構売れているらしい。

イベントの時には、単にリースをするだけでなく、演出から参加者への着付けまでも行うようになり、熊本の祭りでは3～4人で300体の鎧・兜



迫力のある鎧・兜

丸竹産業(株)の業務分野

- 衣装・小道具製作
 - ・刀、槍、毛槍、薙刀、鉄箱
 - ・大名駕籠、神輿、陣羽織、袴、鎧下着等
- 甲冑の修復、写製作、卸・販売
- 等身大ロウ人形製作
- 甲冑レンタル事業
 - ・全国お祭りへの甲冑レンタル業
- まつりの企画
- 甲冑の着付
- 観光事業
 - ・テーマパーク戦国村

の着付けをしたそうである。リースできる鎧・兜は戦国村に常時400～500体のストックがあるそうだ。

また、突然、愛知県の不動産会社の社長さんが訪ねてきて、織田信長の鎧・兜を造って欲しいとの注文があった時は、織田信長の本物の鎧・兜が保存されている神社の許可を得て、まさに本物そっくりに製造したそうだ。ちなみにお値段は400万円である。要望によっては、組み紐の色などを染め方で古く見せることもできる。

●これからは直接仕事を獲得する営業方針へ

現在、年間売り上げ額は3～4億円程度である。以前は数百単位での注文があった映画・テレビの需要が売り上げを支えていたが、映画会社も不況のため大作の時代劇を作らなくなってきたことから、売り上げも伸び悩み気味のようだ。2代目の現社長は、これまで祭りなどへのリース業の場合は、イベント会社や人形メーカーなどからの委託で仕事をしていたのだが、これからは直接仕事を獲得するよう、営業転換を図ることを今後の目標にしている。

また、新たな仕事獲得のため、祭りを盛り上げるための企画、台本づくり、祭り前日の立ち回りの指導など、他の会社がまねできない事にチャレンジしている。

会社を起こしてから製造のノウハウを確立し、人材を養成するまでは、大変な苦労があったのではないかと想像されるが、現在は、製造部分はほとんど内部で作業をしており、鉄板加工担当、鎖取り付け担当などパート毎の作業工程となっている。従業員は約50名で、うち10名が販売・経理担当、約40名の方が製造部門に携わっておられる。戦国村の方は、小道具などを造っている高齢者の方が多いが、本社・工房での従業者の平均年齢は30代前半と比較的若い。甲冑好きな人がインターネットを通じて就職を希望して訪れることがあるらしいが、手先が器用なことが採用の重要な条件となっているらしい。

これから大河ドラマや時代劇を見るときは丸竹産業を思い出すことになりそうだ。これからも若い人材を活かして、鎧・兜のパイオニアとして頑張っていただきたい。鎧・兜に興味のある方は、記念に一度訪ねられてみてはどうでしょう。

(やまだ たつお)

アイランドシティで生き物博士・野鳥博士になってみる

本田 正明

先日、福岡市で整備が進む人工島、アイランドシティでの教育環境を考えるフォーラム(第2回)に参加した。よりによって2月初旬という寒波が厳しい時期にだったが、運良く晴天にめぐまれ、寒さを気にせずに野鳥や海辺の生き物観察することができた。

●なんで環境フォーラムをするのか。

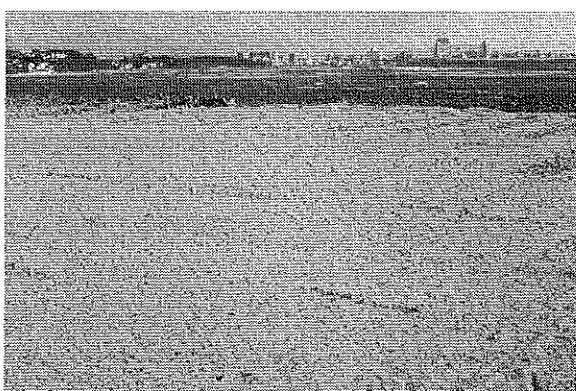
私自身、アイランドシティに行くのは2回目である。3年前に訪れたときは圧密(脱水による土地改良)を行っていたので、あちらこちらに土壤の水を抜くためのペーパーが土に刺さっているのが見られたが、今ではペーパーもなく更地になっていた。

今回のフォーラムの目的は、アイランドシティに先進的・モデル的な教育環境の導入を考える上でどんな教育・人材育成環境を創ればいいか各方面の専門の人や市民に聞いてみたいというものだ。ちなみに一回目はロボットをつくってみるというフォーラムだった。

インフルエンザの流行と寒さの問題があるのでなかなか参加者がいないのではないかと思っていたのだが、40名を超える参加者があり、子どもの参加も10名程度あった。

●観察は小学生になりきれるかがポイント

今回のフォーラムは、砂浜の生物観察と野鳥観察である。司会を務める環境カウンセラーの先生に従い、5人のグループを作って早速砂浜の生物観察を始める。小学校高学年を対象とした内容の



アイランドシティの開発はまだまだこれから

フォーラムということで、大人の参加者も小学生になったつもりでやってくださいといわれる。しかし、大人は周りを気にしてなかなか動きがぎこちない。子どもたちはスコップごと手を砂の中につつこんで生き物を探したりしているのだが、大人たちはなんとか手が濡れないように必死である。

この海岸は砂を入れた人工海浜であり、まだそれほど年月が経っていないので、たいして生き物なんていないのではないかと思っていると、意外にも多くの種類の海辺の生き物を見つけることができた。ウミニナ、イトヒキゴカイ、アサリやタツノオトシゴの仲間などなのだが、「なんでイトヒキゴカイなのだと思う?ほら、口の部分から白い糸のような触覚がでているでしょ」とか、「砂浜にある穴の中にはゴカイがいるんだよ」などと説明と体験が同時なので、大人たちも「どれどれ?」「ほうほう」などといいながら、先生の話に引き込まれ、気が付けば子どもたちを押しのけて聞いたり、見たりしていた。

野鳥の観察も、「お尻の形によって水に潜らない淡水ガモと潜る潜水ガモの違いがわかるんだよ」とか、「カモメの種類もくちばしと脚が赤かつたらユリカモメで、脚が黄色だったらウミネコだよ」などと教えてもらうと、子どもたちと双眼鏡の奪い合いが始まったりしていた。

あまりにも参加者が観察にはまっていたので、「アイランドシティを環境教育フィールドに」をテーマに意見交換会の時間がほとんどなくなってしまったのが残念だったが、アイランドシティの環境について専門家の視点を交えて現状を具体的に知れたことは非常に有意義だった。

●アイランドシティへの足ぐせづくりをもっとやろう

海の中道大橋が開通したおかげで、海浜公園や



大人も子どもも野鳥の特徴探しに必死だ

志賀島などに向かう車がたくさんアイランドシティを通過している。フォーラムの日は日曜だったけれども夕方にはかなりの量の車を見かけた。しかし、アイランドシティには沿道施設や駐車スペースなども未だなものないので、素通りするだけである。ちょっとでも車を置いて休憩できる場所があれば、お父さんが運転の休憩に一服しながらアイランドシティを眺めたりしてくれるのではないかと感じた。

なにげなく近くを通った人たちが立ち寄れるような場が仮設でもいいものがあると、市民の足ぐせがつくのではないだろうか。環境フォーラムのような問題意識をはっきりさせた取り組みも大切だが、アイランドシティを素通りさせるだけでなく、なんとなくここがお気に入りと感じてくれるような人をつくり、アイランドシティのお客さんあるいは応援団になってもらう実証実験の場も要るのではないかと思った。（ほんだ まさあき）

所員近況

みんなでオブジェをつくろう！

2月のある土曜日、福岡市南区にある無認可福祉作業所「工房まる」で行われた陶芸教室に参加しました。

「工房まる」は障害のあるメンバー17名とスタッフ4名で活動しています。ここでは「ものを作る」ということを通して一人ひとりの可能性を引き出すため、木工や陶芸、絵画、書などをやっています。

陶芸教室ということで、自分で好きなものが作れるのであれば何を作ろうか、とあれこれ考えながら「まる」に到着。作業台の上に用意された粘土を見てまた想像を膨らませていました。

いよいよ陶芸教室がスタート。そこで発表された本日のお題は「まるの庭に飾れるようなオブジェをみんなで作ろう！」というもの。勝手に自分の作りたいものを作れると考えていた私はそのお題に「えっ？」と思ったのですが、みんなで作ったものがずっと残るのであればそれもいいかもしれない、と気持ちを切り替えました。

まるのメンバーと外部からの参加者を3つの班に分け、班ごとにオブジェのデザインを考えるところから始めました。デザインは「地から生えて



みんな作品づくりに集中！

きているもの」が共通のコンセプト。私の班では5人のメンバーそれぞれが「地から生えてきているもの」を「でこぼこしたもの」という形で表し、それを1つの土台にくっつけることで決定。それぞれが思い思いに新聞をまるめて形を作り、それに粘土を貼りつけていきます（こうすると粘土の量が少なくてすみ、焼くことで新聞が燃えてしまうので中が空洞になります）。

他の班はみんなで1つのオブジェを作り上げているのに対し、私の班は完全な個人作業となりました。できあがったそれぞれの作品を見たまるのスタッフの人からは、「これを全部くっつけて焼くのはちょっと難しそうだねえ」といわれる始末。土台を作ってくっつけるにしても相当大きな土台が必要となりました。

そのため、ここで当初の計画を変更。5つの作品のうち3つの作品をくっつけて玄関に飾れるようなオブジェとし、他の2つはそれをハガキたてや花器として使うことに決めました。2時間の教室のあと、みんなで昼食。昼食のあと残っていた少しの作業をして、陶芸教室は終了となりました。

はじめはうまくできるのだろうかとドキドキしていましたが、できあがった3つのオブジェはどれも力作。みんなで一緒に1つのものを作り上げるのはとても楽しかったのですが、久しぶりにさわった粘土の感触もとても気持ちがよかったです。焼き上がりを見るのが今から本当に楽しみです。

「まる」では時々このような教室を開いているそうなので、機会があればまたぜひ参加したいと思っています。

（梶原 里香）



■反逆の獅子

陸軍に不戦工作を仕掛けた男・浅原健三の生涯
角川書店
桐山桂一

ある人に「絶対開かない金庫を鍵を使わずに中の物を取り出すにはどうすればいいか?」と問われたことがある。そのときは質問の意味がわからず、金庫を爆破すればいいとか、堅い金庫同士をぶつけ合えばいいなどと方法論ばかり言つた覚えがある。答えを聞くと「形あるものはいつかなくなるから、金庫がなくなるまで待てばいい。そうすれば中の物が取り出せる」ということだった。

これはとんちなのだが、なかなか奥深い答えである。私の答えはいかに一瞬の内に開けるかという手法しか頭になかったのだが、もっと時間という幅を考えなさいという教えのよう私は感じだ。海外留学などをして日本の外から客観的に自分や自分の見つめることも大事だが、自分の国の歴史や文化をもっと知ることも同じように大切なかも知れないと社会人になってようやく気がついた。(梅棹忠夫さんが「日本とは何か」という著書の中で“アイデンティティ”を“歴史的連続性”といっていることにもかなり影響を受けた。)

この本の主人公である浅原健三という人の生涯を通じても、昭和初期の日本がどのような社会になっているかが非常によく伝わってくる。これは桐山さんが記者であり、歴史的事実を丹念に調べられて書かれているからだと思う。

恥ずかしながら、私は今まで浅原健三という人物すら知らなかった。大正9年の八幡製鉄所の大ストライキが起った際、争議を指導したのが彼であり、そのことを書いた「溶鉱炉の火は消えたり」という著書はあまりにも有名なのだそうだ。私の歴史についての視野は、受験勉強で満州事変などの年号を覚えまくったあたりで止まっているので、歴史年鑑や百科事典などから彼が活躍した当時の世相や出てくる人物が何をした人かを知ることから始めなければならなかった。

ただこの本の主眼は、大ストライキのことではなく、日中戦争の勃発を防ぐために彼がコーディネーター役、マネジメント役として奔走したことにある。彼は“とにかく鄧小平に一度ギャフンと言わせたい”という程度の短期的な目標しか持っていない軍部が戦争をはじめようとしているのを何とかやめさせようと走り回るのである。中国の領土は広く、追いつめることができないので戦争は必ず泥沼化する。疲弊してしまえばロシアの脅威に備えられないという長期的で常識的な視野をもっていた。結果として戦争を止めることはできなかつたのだが、彼の行動はさまざまなことを教えてくれる。

ことを成すためには長期的で常識的な視野を持ち、モチベーションを失わず、コーディネーター役、マネジメント役として動き回ること。まさにネットワーク型人間のかたまりのような人である。

(本田 正明)

第11回よかネットパーティーのご案内

人と人との交流の場、「人もうけ交流会」を今年も開催いたします。皆様のご参加をお待ちしております。

日時：平成14年5月10日（土）13:00～15:30
場所：警固神社境内 中央棟
(福岡市中央区天神)

編集後記

この冬の寒さは、例年の暖冬に慣れた体には厳しいものでしたが、もう3月です。去年は行きそびれたので、今年は桜の下でゆっくりと花見をしたいと思っています。（あ）

よかネット No. 62 2003. 3

（編集・発行）

（株）よかネット

〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F
TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

<http://www.yokanet.com>

mail:info@yokanet.com

（ネットワーク会社）

（株）地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-6942-5732

東京事務所

TEL 042-501-2531

名古屋事務所

TEL 052-265-2401

（株）地域計画・名古屋